ふるさと歴史アラカルト

害獣と戦う人びと

最近は人の生活圏でサルやクマが目撃される話をよく耳にします。現在岩国市において動物による農作物の被害は、イノシシとサルによるものが大部分を占めているようです。今回は江戸時代後期に見られる獣害対策を紹介します。

岩国領では江戸時代初期から紙の専売制度が導入されていたこともあり、錦川・小瀬川流域の山間部を中心に楮（和紙の原料）の栽培が行われていました。そのような中、安永3（1774）年には村里から離れた山畑などに植えられた楮が、人の手入れが行き届かず、シカやサルによって芽立ちから食べられる状況が報告されています。そこで楮へ害を与える動物を駆除した者へ褒美を与えることとしました。紙蔵から通達された項目の一つ「鹿猿兎之事」によると、褒美を受け取るには、捕獲した動物を当地の村役人などが詳細に調べた後、3日以内に報告することが必要でした。

寛政4（1792）年の『本紙黒保請※2払御算用状』には、閏2月28日に赤谷村（現在の天尾）辺りでイノシシやシカが多く出没し、作物の栽培に被害が出ているとの申し出があります。この時は地元の猟師が駆除し、米3斗2升が褒美として支給されました。この約1年余りで鹿106頭、小鹿16頭、猿29匹、大兎64羽、小兎130羽が駆除されています。

イノシシに対しては猪狩が行われ、柱野村には特に長けた猟師が多かったようです。文化10（1813）年11月29日に行われた領主の猪狩では「※3繋の者」として柱野村から11人、日宛村から3人、長谷村から1人が動員され、柱野村の猟師が圧倒的に多いことが分かります。領主が行う猪狩の多くは軍事訓練を兼ねた娯楽とされていますが、害獣駆除を目的とすることもありました。

近年はヌートリアなどの外来生物も加わり、さまざまな害獣対策が取られています。このような現状を見ると、対策方法は違えども害獣と戦う状況は江戸時代と変わらないと言えます。

※1　楮の栽培と紙すきの奨励監督の事務を行う所
※2　紙蔵における1年間余りの会計報告書
※3　事前に狩場へ入って足跡を探し、どこにどのくらいの猪が潜んでいるかを推定し、犬と勢子で、領主などの射手が構えている所へ猪を追い出す役割の人

『御猪狩記』より、文化10年11月29日の猪狩にて柱野村の猟師が「繋の者」として動員されたことを示す部分

岩国徴古館

昭和20年に旧岩国藩主吉川家によって建てられ、その後岩国市に移管された市立の博物館
住所：横山二丁目7－19　☎(41)0452
休館日：月曜（祝日の場合はその翌日）

岩国市　人口・世帯

人口　133,945人【前月比 －2人】　男性　63,597人　女性　70,348人

世帯　65,708世帯【前月比 ＋53世帯】　※外国人人口を含む（2019年9月1日現在）

交通事故発生件数

8月分事故件数　24件（177件）　死者数　2人（5人）　傷者数　23人（201人）
※高速道路発生分を除く。（　　）内は2019年累計

目の不自由な人へ

「広報いわくに」のカセットテープをお貸しします。
お問い合わせは、広報戦略課☎(29)5016 FAX(21)3337